大井久美子

Oi Kumiko

おおいくみこ。東京出身。長崎大学副学長。大学院医歯薬学総合研究科教授。男女共同参画推進センター長や広報戦略本部長も兼務。プライベートではフィルハーモニックオーケストラ・長崎（通称PON）の団員でチェロ奏者を務める。

挫折も神様のプレゼント？ 長崎に縁を結んで29年

超低空飛行の末に出合った麻酔の世界

「殴り合いのケンカは一〇歳でやめました（笑）。そのころ、掃除をサボる男子は雑巾の入ったバケツに顔を突っ込ませてね、でも先生に言いつけないのが私のルール」。

新コーナー。トップバッターは長崎大学副学長にして歯科麻酔の専門医でもある大井久美子先生。勇ましいエピソードが次々飛び出す先生ですが、広報戦略の本部長として、昨年の長崎大学リレー講座でも堂々たる仕切りぶり。どんなゲストにも自分の言葉で語りかける姿が印象的でした。さぞや学生時代から……？

「とんでもない、私の学生時代は超低空飛行よ！　男子の多い学校ならモテるかもと淡い期待を抱いて入ったのが、当時東大合格者数ダントツの東京都立日比谷高校。まわりは秀才ばかりで、挫折感に打ちのめされました。東京医科歯科大学では学園紛争に巻き込まれてブラックリストに載って就職もままならない。麻酔の世界に入ったのは、同大の歯科麻酔科医局に入ってから。面白い世界だなぁ、私の、これまでの挫折は神様が麻酔に出合わせるためのステップだったんだなぁ、と」

三五歳で長崎大学へ。大学院を立ち上げるタイミングで、初めは三年くらいで離れるつもりだったのが、いつの間にか二九年。助教授、教授と立場が重くなるほどに人間関係に悩むことも多かったとか。

「圧倒的に、女性は少数派。男尊女卑も凄かったし、意地悪もいびりもされて、『もう帰りたい』と泣いたことも何度もありました。でも、そのたびに実家の母が言うんです。『一年目には一年目の、三年目には三年目の、五年、七年、一〇年とそれぞれの辛さがある。あなたの抱えている辛さは、まだまだ未熟だ』。ほかの女性研究者とも話しているのですが、私たちの仕事って継続と積み重ねが大切です。仕事を続けることを応援してくれる人がいるかどうかがすごく大きい。そのころは『意地悪をされている』と思っていたことも後になると自分の力になっている。実は真っ当な指導を受けていたんですね。カッとなって辞めないでよかったと、今では思えます」。

看護師さんたちが心の支えに

もう一つ、苦しい時代に支えてくれたのが、ともに働く女性たち。特に、大学病院の看護師さんたちには何度も助けてもらったそうです。麻酔が必要かどうかの場面で、患者の気持ちを最優先に考える看護師の言葉に救われることもしばしば。プライベートでも仲良くなった彼女たちとの友情は今も続いているようです。ところで先生、副学長ともなると大事な会議で主張する場面も増えて、さぞ気苦労も多いのでは？

「はい。でも、ちゃんと下調べして手元にカードを持っておく。そのために事務方としっかりチームを組んで臨むことです。最後は必ずひとこと発言します。大事な会議で言い負けないのは、どれも小学校時代のケンカが役立っているんですね。悔しい思いも、みんな経験になって生きている」。

新規採用に占める女性教員の割合を三〇％にするという長崎大学の中期目標は、大井先生が中心となって提案しました。

センター長を務める男女共同参画推進センターでは、学生が保育に参加するボランティア制度「長大モデル」を二〇〇九年にスタートさせるなど、ソフト面でのサポートを充実させようと模索しています。女性がいきいきと働き続けられる大学。それは長崎大学が目指す一つの形でもあり、先生の夢。「自分が興味を持っていることはやらずにいられない」という好奇心をエネルギーに、大井先生は今日もキャンパスを飛び回っています。

趣味は、30歳から始めたチェロ。「弾きたい曲を弾く」という信念のもと、プロも嫌がる難曲もモノにした、と嬉しそう。独身のそのわけは？「たぶんね。私、日比谷高校時代にいい男を見過ぎちゃったのよ（笑）。世の中、パンツのゴムが伸びきったような男性が多いじゃない？」。明快なお答え、恐れ入りました！

働くウーマン奮戦記

大学はわたしの仕事場 1

長崎大学で働く女性教職員の活躍ぶりを毎回お一人ずつ紹介します。ステキな先輩たちの後ろ姿を見て女子学生も何かを感じて欲しい。そんな願いをこめた新コーナーです！